総合教育センターだより

街路樹

発行第１０４号
平成２８年　８月２４日（水）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

学力差への対応

各校に学校訪問等で伺った際、指導案上の「学級の実態（あるいは児童観や生徒観）」で、または事後研究における授業者の先生方からの自評の中で「この学級は学力差が大きくて…」といった言葉を目にしたり耳にしたりします。しかし、学級編制を行う場合、習熟度別に編制することはまずないでしょう。つまり、どの学級においても上位・下位児童生徒の混在は必然と言えます。

授業を行っていく上では、多様な児童生徒が教室にいることを踏まえ、教員には全体を進行していく力量が求められます。授業の進行、舵取りをしっかりと行い、全体への発問や指示を行いつつ上位層、下位層それぞれの指導に当たる時間も確保するのは、簡単なようで難しいことです。

効果的な方法の１つに、常に上位児童生徒用の発展課題を準備しておく、というものがあります。上位層の子どもと下位層の子どもが同時に支援を必要としている際、下位層の子どもを優先し、上位層の子どもを「ちょっと待っててくださいね」と待たせた場合、その時間が「ちょっと」で済む可能性はあまり高くありません。

もちろん下位層の子ども達に手厚い個別指導を行うことは言うまでもなく大切なことです。しかし、「他よりも速くできる子」がそれによって時間をもてあますことがないようにすることも同様に大切であると言えます。発展課題を用意するだけでなく、ミニティーチャーとしての役割をもたせるという方法もあります。

大切なのは、どの児童生徒も授業の中で達成感を得られるような場面を教師が意図的に準備する、という気持ちだと思います。目の前の児童生徒にとって何が最も有効かは、普段から接している先生方が一番よく理解しているはずです。全ての児童生徒が大切にされる授業のあり方について、知恵を出し合い、一緒に考えていきましょう。

「いじめに関する研修ツール」について
～生徒指導～

2学期

今回は、国立教育政策研究所より発行されている「いじめに関する研修ツール」について紹介します。

いじめの問題は、いつ、どの学校においても起こりうるものとして取り組む課題と言えます。また、早期発見・早期対応にとどまらず、未然防止の取組が望まれる課題でもあります。

このようないじめの問題に、学校全体で取り組んでいけるよう、参加者の資質を高める研修会のために作成されたツールが「いじめに関する研修ツール」です。最初に、参加者一人一人に、いじめに対する認識や取り組む姿勢について「自己点検」を行い、その後、グループでの話合い、全体での話合いを行う中で、参加者全員が共通の認識に至ることができるよう工夫されています。

さらに、自校の実態を踏まえた話合いや検討会を行うことで、より効果的な研修となることと思います。

いじめの問題に取り組んでいくためには、「いじめとは何か」「どう対応すべきか」を常に問い直し続けていくことが大切です。このツールを活用し、研修を深め、実効性のある学校組織づくりに努めていきましょう。

引用「いじめに備える基礎知識」（国立教育政策研究所）

井戸端を学校に ～教育相談室～

教育相談室の電話は、多くが母親からである。子どもを心配するあまりの相談だが、子どもはあまり困っておらず（自覚がなく）困り抜いているのは母親であることが多い。

そして、そんな相談の中には井戸端会議で解消できるのではと感じるものも多くある。

ところが、現代社会に井戸端はそう多くはない。そこで、井戸端がない現代の受け皿はどこなのかと考えた。子どもの実態の把握できないところでは端から無理である。

また、子どもは成長と変化が期待できるだけに情報拡散は避けたい。となると、子どもの成長という同じ方向性で子どもにかかわれるところは学校しかない。

困り抜いている親は心の安定を失い、それが子どもへの過剰な干渉となって負の連鎖を形成することが多い。そんな時に気軽に話し合える場と機会（井戸端）を設け親に寄り添い、親の安定と変化が子どもの成長に直結できる場所が学校であってほしいと、期待は膨らむばかりである。